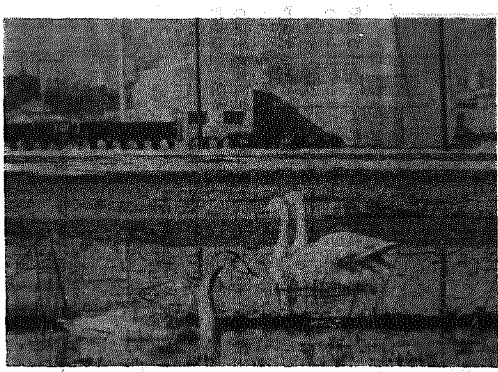
自然・環境破壊をよそに
ゴイサギや白鳥の飛来

大寒入りを目前にした二月十六日は、雪は少なく、春日を思わせる好天であった。
横雲橋を往き交うさまざまな車の流れ、なかには、県外ナンバーもみられる。
下流の川岸には、護岸工事が始まり、上流には、水道の取水工事が進められている。
まだ遠い年ではない頃の正月は、のんびりした時世であったが……。
堤防上をツッ走る車は、ホコリを巻きあげ、飛ばして行く。
この騒音の激しい堤防下の川畔に、野鳥の宝庫「鶴ケ島」が一望される（一面の写真）ここは、昭和三十三年頃まで中州で、四季を通じ子どもたちの遊び場であった。それがいつの間にか柳をはじめヨシや、雑木などのヤブに変り、野鳥には絶好のすみかとなり、ムクドリ・バン・カモ・アオジなどの楽園となった
さらに、五年ほど前から四国や、九州地方に繁殖する暖国の鳥「ゴイサギ」（通称夜鴉）が留鳥として七十羽から百羽ほども住みついている。
「工業化する西日本地帯から追われる南の鳥にとって、ここが北限のすみか」
ともあれ、自然の環境を守ってやり、安住の地としたいものである。
村が地域開発への触手として都市計画を進めて四年（昭和44年条例制定）いま、横越・川根谷内間は、軽工業、住宅団地等の造成で地域が大きく変わろうとしている。
さらに、新潟市の水道浄水場の建設など、新たな施設の工事が始められている。隣接して統台校舎の敷地埋立てのダンプが走り、ブルトーザーがうなりを立てている。
この片隅みの水だまりの田圃に、北からの渡り鳥「白鳥」の親子七羽が羽根を休めてえさをあさっていた。
おそらく、瓢湖（水原町）から遊飛してきたのだろう。
近く埋立てられるわずかに残された水田に、近代化の波をよそに、白鳥が無心にえさをあさっている姿は、人間の環境変革に対比してみたくなる一景でもあった。

※　※　※　※



（浄水場建設用地でえさをあさる白鳥）

家庭教育 ⑦

いつの時代でも、親子関係ほどむずかしいものはない。親子の問題は、おもにその相互的心理関係に問題がある。
父親が厳格すぎたり、無関心、放任状態である場合や母親の無監督や母親との敵対意識が強かったりする場合には、問題が生じやすい。

ぶつぶついう母さんはきらい

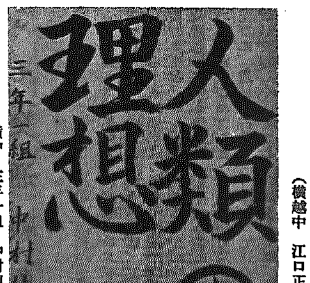
親子関係

「お父さんは、ぼくのことをおこってばかりいる。自分はお酒ばっかしのんでいて」
「お母さんは、お父さんに文句を言われると、ぼくにあたりちらすからぼくは、家を出てゆきたくなる。」
これらは、子どもが親に対する一つの希望であり、願望にしかすぎないが、よく考えてみると、親の理解あることばや、愛情に満ちた態度を子どもは　期待していることである。
つまり、いかに貧しくとも子どもを励まし、子どもと話し合える両親を子どもは望みまた、子どもは、自分を家族の一員として認めてもらいたいと考えている。
ふだんの生活のなかで、子どもは、実に、親の生活状態をよくみている。そして、それを子どもなりに批判している。親にとっては、なんでもないあたりまえのことであっても、子どもにとっては、不平、不満、不安、反感、疑問などの感情をもってみつめている。
また、これと逆に、よろこび、楽しみなどの場合も同様のことがいえる。
こうしたことが、現実には子どもの心に長く残り、おとなになっても、よきにつけ、悪しきにつけ、心の中に大きな思い出となるものである。
親子関係は、本来、美的なものであり、情的なものである。親子愛は、人間の愛情のなかで、最も自然で、きわめて、無意識的な人間関係である。
しかし、現実の子どもの生活の背景には、多くの矛盾と問題を多少にかかわらず、もちすぎているようである。
それが、どうしたことか、親子の感情のもつれや言い争いが、しまいには、親子けんかのようなものになってしまうことがよく見受けられる。
親のほうでは、自分の意志のままにならないと思わぬ強いことばがでたり、子どもは売りことばに買いことばになってしまう。
親子の言い争いは、実に多いが、もちろん、ささいなことであり、言い争うというほどまでではないにしても、子どもは、客観的な事実として訴えていることを考えさせられる。
たしかに、親子というのは問題をもちやすい。親子は、本当の意志の交流がおこなわれにくいように思えてならない。
親も子も一方的でひとりよがりに見える。それぞれ自分の言い分を通そうとするところに無理が生じているようである。
子どもにしてみれば、親へ多くの「言いたいこと」「願いたいこと」などがあり、親にしても、子どもに「言いたいこと」「やってもらいたいこと」が数限りなくあるようである。
問題は、こうしたことを厳粛な事実として受けとめさらに原因をほりさげ、よい親子関係のあり方をみつめてゆくべきである。
そこで、両親が、つとめて自分の子どもたちと〝会話〟や〝家族会議〟を開いたり、親子の〝話し合い〟や〝相談〟をすることが必要である。
特に、子どもといっても就学前の幼児と大学受験前の高校生とでは、話し合いの能力も違うし、、反抗期の子どもを話し合いに誘いこむのもむずかしい。それなりに親としても会話や話し合いの適当な知識と技術が必要になってくる。

こどもサロン

横中　三年二組　原　淳二君

＜評＞
年賀状版画というと、とかく、おめでたい図柄やその年にちなんだ動物などがとりあげられやすいが普通の絵を描くような気持で自分の生活の周囲を見つめて作品をつくることが大切である。原君は、柔道クラブにはいっているのでこの作品ができたものと思う。画面にほどよく構図され、色刷りの効果もよくでているが、形をあらわす輪郭線が単調でややかたい感じがする。
（横越中　江口正己先生）



横中　三年一組　中村純子さん

＜評＞
全体として、弾力性のあるねばっこい感じの書になりました。また、練習不足のため、楷書の堅さがみられますが、もうちょっと書きこみますと、流れるような、まろやかな美しい線がでてくると思われます。字くばりを見ますと、漢字の部分が上下くっつき過ぎたようです。
（横越中　稲葉幸之先生）

ーみんなの広報◆みんなで明るい村をつくろうー

◆投稿をお願いします◆

青田風ふところに農五十年
時雨るゝや暮色がつつむ残り柿
冬構え終えて淋しき庭暮るる
年経ればふるさと恋ほし幼日に
よく叱られし父母の墓あり

広報「よこごし」に村民の方々から頂いた作品の中から印象的なものをあげました。村民の方々の気持のよくあらわれている作品だと思います。その外の方々の作品もたくさん頂いて、「よこごし」を飾って頂いたことを心から感謝しております。村民の方々の考えていられること、文芸作品写真など掲載して広報が村民の方々のものであるように努めたいと思います。村民の方々からもご参加頂いて一しょになって広報「よこごし」を育てていきたいと思うのです。そのために新年度からは、広報モニターのような形で村民の方々をお願いし、村民のものになるようにご意見を頂いて編集していきたい。そこで次号からは次のような欄を特設したり、お寄せ頂いたものを掲載していくようにしたいと考えています。

(1)「文芸欄」の新設
前にはこちらからお願いして作品を提供して頂きましたが、今度は詩、俳句、短歌、川柳などの作品がありましたら、どんどん公民館あてお送りください。順次掲載していきます。公民館では知らないでおつくりになる方が横越村内でも多くおいでになると思います。将来、その文芸欄を基盤にした同好の方々のグループなどができたらなどと期待しています。

(2)「私も一言」的なもので、いろいろなお考えがあられると思いますが、ありましたら是非お寄せください。日常生活に関係したことなど、広報の性格の枠内での作品をお願いします。余り長いものはスペースがありませんが、四百字詰原稿用紙一枚程度におまとめ頂いて、お願いできればと思っています。

(3)「写真」、お取りになった写真で、横越村での出来事、横越村に関係のある作品、風景などでも結構です。よい作品ができましたら是非お願いします。本号から、トップの写真に横越村十二景とでもいう写真を掲載することに予定しています。それに適当な写真がありましたら、どしどしお寄せください。

広報も趣きを変えてから九回目になりました。村の状況をお知らせしたり、村民の方々のご参加を頂いたり、できるだけよいものにしていきたいと思いますので、是非ご協力を頂きたいと存じます。